

2009年(平成21年)3月19日

病院長からの一言

～高度救命救急センター設置に向けて前進～

弘前大学医学部
附属病院長 花田勝美



本院に新外来診療棟が竣工して早くも1年が経過しました。明るい環境、新機構満載、プライバシーに配慮した診療、なにより充実した診療内容が患者様に歓迎されています。これに満足することなく、これからも患者サービスに努めて参ります。

本院の整備はこれで終わりません。かねてより院内外の強い要望でありました「高度救命救急セン

ターの設置」を平成21年度の概算要求事項として申請中でした。遠藤正彦学長始め全学の懸命のご努力により、ついに日の目を見ることとなりました。現在、政府案として計上されているところです。これにより本院は大きな変革をとげるとともに、地域の救急医療の体制固めに貢献することは間違いありません。緊急被ばく医療を兼ね備えた「高度救命救急センター

としては本邦で初の施設になります。本年1月30日、岡 誠一文部科学省文教施設企画部技術参事官一行が来院され、「高度救命救急センター」設置予定地の視察、NICUの今後についての意見交換が行われました。2月18日には、タイミング良く、三村申吾青森県知事より、本院の「高度救命救急センター」の被ばく医療、ヘリポート等に対する財政援助についての発表がありました。財政的にも困難なこの時代に国と県を挙げてご支援いただけましたことに深く感謝いたします。開設は平成22年7月の予定です。期待に添うべく本院一同開設に向けての準備に努めたいと思います。ただ、今後の運営に当たっては、近隣の市町村、市民のご協力もお願いしなければなりません。

本院には、2月5日、アーチェリーで有名なアテネオリンピック銀メダリストの山本 博さんが表敬訪問されました。2月20日に



▲岡文教施設企画部技術参事官来院(産婦人科センター)

は外来診療棟竣工一周年を祝い、エフエム青森のご支援で、歌手の椎名 恵さんによる院内コンサートが開かれました。魅力に溢れたお二人から「元気」をもらい、心が「癒され」ました。寒い季節でしたが、更り多き冬となりましたことを嬉しく思います。

(平成21年2月末記)



▲山本博さん来院

各診療科の紹介

【医療情報部】

医療情報部は平成8年4月に省令設置されました。現在の「病院情報管理システム」の先駆である「医療情報システム」の導入期には旧第3内科の須田俊宏教授が部長(代行)を務められ、須田教授の指導の下、医事課の担当係長(兼務)が諸々の導入業務に携わりました。その後は羽田部長(平成8年12月1日発令)のもと教員(医師)2名、看護師長(兼務)1名、医事課職員(兼務)5名、技能補佐員1名が中心となり、病院情報管理システム(ネットワークを含む)の企画・開発・管理運用(学則-附属病院医療情報部内規による)を行っています。

平成8年1月1日に医療情報システムが稼働して以来、医療情報部では3度のシステム更新を行ってきました。①「2000年問題」への対応を含めたシステム更新

(稼働平成12年1月1日)、②契約満了に伴うシステム更新(病院情報管理システムと称変更された。平成16年1月1日稼働)、③契約満了に伴うシステム更新(平成21年1月1日稼働)であります。システム更新に際しては、システムの在り方や重点目標を定めて企画・開発を行います。実務的には医療情報システム委員会(旧医療情報部運営委員会)の下、各種ワーキンググループ(WG)の検討結果を基に開発が進められます。現行(平成21年1月1日稼働)のオーダーリングシステムについては、WG委員長の産科婦人科学講座藤井俊策准教授の卓越したIT知識、業務運用に関する見識により、着実に開発が進んでいることを皆様にお伝えするとともに深



謝したいと考えます(羽田部長より)。

これからの医療情報部の業務上の課題は電子カルテシステムの早期導入・稼働であります。が、それ以前に、現在方々の国立大学法人を震撼させている病院情報管理システムのウイルス感染(攻撃)に対して早急に予防対策を講じる必要があります。皆様のご理解とご協力を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(医療情報部副部長 佐々木賀広)

緩和ケア研修会開催

がん対策基本法施行により、がん診療に携わる全ての医師を対象とした緩和ケア基本教育が行われることとなり、都道府県やがん診療連携拠点病院が主催する緩和ケア研修会が昨年秋から全国的に開催されています。本院では第1回研修会を1月17日から18日の2日間にわたり開催しました。多忙な業務の中、津軽地域の病院勤務医師5人、当院の医師17人と歯科医師1人、計23人のご参加を頂きました。研修会は、厚生労働省の委託事業として日本緩和医療学会が進めているPEACEプロジェクトによって作成された教材を用いて、緩和ケアの概念、がん性疼痛、呼



吸困難や嘔気・嘔吐、抑うつやせん妄といった精神症状、コミュニケーション、地域連携、といったテーマごとに、グループワークやロールプレイを含めたワークショップ形式で進められ、参加者全員に厚生労働省発行の修了証書が贈呈されました。これからも研修会の回を重ね、津軽地域において、いつでも、どこでも、切れ目ない、質の高い緩和ケアが提供される下地を作っていきたいと考えております。第2回以降も多数のご参加を期待いたします。ときわ会病院馬場祥子先生、青森県立中央病院の沼尾宏先生と西川晋右先生にファシリテーターとして多大なご援助をいただき、当院緩和ケアチームメンバーや有志学生の協力も得て、参加者からも高い評価を得ることができました。参加者、協力者の皆様にご場をお借りして御礼申し上げます。

(麻酔科 緩和ケアチーム 佐藤哲観)

診療費のクレジットカードによる支払い導入

以前からご要望が多かったクレジットカード決済による診療費の支払が、平成21年1月より可能となりました。これは、病院情報管理システムの更新に伴いサービスを開始したものです。ご利用いただけるのはVISA、MasterCard、JCB、DC、UFJ、NICOS、AmericanExpressの各カードで、いずれも一括払いのみの取扱いとなっています。

サービスの開始に向けて、12月中から来院患者様へお知らせを配布、院内各部署のご協力を得てポスターを掲示するなど周知に努めてまいりました。おかげさまでトラブルもなく、順調に運用できております。

患者様には、事前に多額の現金を用意する手間が省ける、入院費を病室に置いておかなくてもよい等のメリットもあり、ご好評をいただいております。

また、サービスの開始に併せて、診療費自動精算機を従前の2台から4台に増設いたしました。これにより診療費収納業務をより一層迅速化し、混雑時の患者様の待ち時間の短縮につながるものと考えております。自動精算機は外来診療費のみの取扱いとなっており、現金・クレジットカード決済それぞれに対応しています。医事課③番窓口においても、現金・クレジットカード決済それぞれの支払が可能となっています。これからも患者様のニーズに対応したサービスを提供していきたく、努めてまいりたいと思います。(医事課)



5月に弘前大学創立60周年を迎える。これを機会に、附属病院10年の歩みを振り返ってみたい。

10年間の附属病院の課題は国立大学法人化への対応であった。平成11年4月に就任した原田病院長は「近未来における病院改革」の担い手として病院長補佐体制を導入した。後任の鈴木病院長は経営合理化を目的とした病院経営改善室を発足させ、法人化に向けて中期目標・中期計画を策定した。平成16年4月法人化と同時に就任した棟方病院長は病院長の権限強化のため中期計画に専任制を盛

り込み、平成18年4月には花田教授が選出された。棟方、花田両病院長の課題は向こう6年間の中期目標・中期計画の達成と、毎年2%の減額予算と建物・医療機器の借入償還金への対応であった。

診療面では平成17年4月神経内科、平成19年4月に腫瘍内科が設置された。また、平成15年4月から診療報酬は「包括方式」に変更され、平成17年4月から内科・外科診療科名が臓器別表示となった。一方、中央診療施設等は従来の部門・施設等の改組、新設を含め計24部門等になり、各

先憂後楽

附属病院10年の歩み



病院広報委員会委員
小児外科 棟方 博文

種マニュアルが21冊作成された。さらに、ICUの増床と稼働率に応じた病床の再配置、医薬品・医療材料の規格統一化、7対1看護体制の導入、細胞検査士の採用など、積極的な増収対策も講じられた。

再開発事業は平成11年11月中央診療棟、平成19年9月に外来診療棟が竣工し、既存外来診療との解体と環境整備を残すのみとなった。施設整備では64チャンネルCT、PET/CTなどの最新式の大規模医療機器が多数導入され、附属病院は特定機能病院にふさわしい最先端設備を有する施設となった。

今後、平成22年7月の稼働が決定した「高度救命救急センター」の運営が課題となる。経営改善係数は平成21年度で終了するものの、同センターの運営には数々の苦難が予測される。外部からの支援を求めることは当然ではあるが、何よりも病院全体が一致協力しなければ立ちゆかない。病棟再編成、医師の再配置、全職員の意識改革など、組織全体の改革が求められている。同センターの開設が「研修医の大学病院離れ」を少しでも大学に呼び戻す契機になればと願わずにはおられない。

セカンドオピニオン外来開設にあたり

本院では地域社会に貢献する使命のもとに診療を行っておりますが、さらに平成19年より地域がん診療連携拠点病院として指定を受け活動してまいりました。

この度、拠点病院の活動の一環として患者様及び家族の心身の健康と希望をもたらすために、悪性腫瘍に限定したセカンドオピニオン外来を平成21年1月19日より開設致しました。

セカンドオピニオン外来は完全予約制とし、料金は31,500円に設定されています。詳細は本院

ホームページに掲載されておりますので、そちらをご覧ください。

次にごん診療相談支援室の取り組みとして、①悪性腫瘍に関する種々の相談②がん治療における地域の医療施設との連携パスの役割を図る③一般市民を対象にした公開講座などの開催を予定しております。

がん診療相談支援室は昨年12月に開設し始動したばかりです。皆様からのご支援ご指導よろしくお願い致します。

(医事課)

院内コンサート開催

本院では、患者サービスの一環として院内コンサートを実施しています。昨年12月19日と翌年2月20日の2回、いずれも外来待合ホールで開かれました。

12月は、「医学部管弦楽団 & 医学部創立50周年記念アンサンブル」によるクリスマス院内コンサートが行われ、高さ3mの大きなクリスマスツリーが飾られたホールには一足早いクリスマスムードに包まれました。

2月には、外来診療棟オープン1周年を記念して、歌手の「椎名

恵」さんをゲストに「エフエム青森」の公開録音による院内コンサートを開催しました。

花田病院長の挨拶に引き続き、椎名さんの透き通るような歌声が吹き抜けの開放的なホールに響き渡りました。椎名さんは病院でのコンサートは初めてとのことでしたが、「今夜ANGEL」など8曲を歌い上げ、詰めかけた約150人程の患者様方を魅了していました。

会場の患者様方は、「ヤヌスの鏡」から「機動戦士ガンダム0080」



までドラマなどの主題歌を歌わせたら右に出る者はいないと言われる歌声に聞き入るとともに、カーペンターズの名曲に手拍子をするなど楽しいひとときを過ごしていました。(医事課)

平成21年度弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる

第11回附属病院診療奨励賞授賞式が、医学部学術賞及び医学部医学科国際化教育奨励賞授賞式と共に、1月30日に医学部コミュニケーションセンターにおいて執り行われ、受賞者に花田病院長から本賞の盾及び副賞として財団法人弘仁会から奨学寄附金が贈呈さ

れました。今年度は診療技術賞として腫瘍センター(代表 佐藤淳也 外3名)の「がん医療専門職協働による外来化学療法の質的・量的向上」、集中治療部、麻酔科、手術部、救急・災害医学講座(代表 橋場英二 外4名)の「集中治療室におけるブドウ糖希釈法によ

る重症患者の体液量評価」、呼吸器外科・心臓血管外科、放射線科(代表 谷口 哲 外8名)の「静脈血栓症の予防と治療のとりくみ」の3主題が受賞しました。授賞式に引き続き、祝賀会が同センター内にて和やかに行われました。(総務課)



がん医療専門職協働による外来化学療法の質的・量的向上

腫瘍センター 外来化学療法室

医師 伊東重豪
(腫瘍内科学講座所属)
薬剤師 佐藤淳也(薬剤部所属)
照井一史(薬剤部所属)
看護師 粟津朱美(看護部所属)

●診療技術賞を受賞して

代表 薬剤部 佐藤淳也

この度、第11回となる弘前大学医学部附属病院診療技術賞を頂きまして誠にありがとうございました。外来化学療法室は、平成16年10月に開室し、現在までに1万件以上の治療を重篤な過誤なく提供してきました。その間がん化学療法の外来化が続き月間の利用件数は当初の3倍以上、月400件に迫る勢いが続いております。私たちは、このような背景において業務の量的あるいは質的向上に努めて参りました。

まず、実施件数増に対応するという量的な向上には、腫瘍内科学講座の西條康夫教授のご指導のもと、各診療科の先生にプロトコルの標準化にご協力頂いたことが大きく奏功しています。亜型多数

で100種類以上のプロトコルが安全性と効率性の観点で審査され、実質的に40種前後に標準化されたことにより安全な治療が提供できるほか待ち時間の大幅な短縮につながりました。また、質的に向上に努めてきた点は、業務量が増えても点滴センターに甘んずることのないよう副作用のモニタリングや支持療法の提案、患者指導に力を入れてきた点です。現在、全ての患者様ががん治療に精通した薬剤師や看護師の指導を受けております。外来化学療法は、患者様のセルフケアが重要である点で、安全な抗癌剤投与と患者指導は、質の高いがん化学療法の両輪です。これらの体制は、がん薬物療法専門医、がん専門薬剤師、がん化学療法認定看護師がそれぞれの専門性を発揮して協働してきたことに他ならないと考えております。今回の受賞を励みとして、がん治療のプロとしての自覚と専門性を磨き、患者様には「弘前大学医学部附属病院で治療をして本当によかった」と思われる様切磋琢磨して参りたいと思います。

集中治療室におけるブドウ糖希釈法による重症者の体液量評価

集中治療部 橋場 英二
麻酔科学講座 石原 弘規
集中治療部 坪 敏仁
救急・災害医学講座 大川 浩文
麻酔科学講座 廣田 和美

●診療技術賞を受賞して

代表 集中治療部 橋場 英二

この度は、名誉ある賞を頂きありがとうございました。我々の受賞理由である「ブドウ糖希釈法による体液量評価」は、麻酔科学講座准教授石原が、1979年にシカゴに留学した際に得た発想から始まり、その後数々の動物実験、臨床研究を経て現在の臨床応用に至った方法です。

この方法は、5gのブドウ糖を中心静脈ラインより投与し、血糖の上昇値でブドウ糖初期分布容量(Initial Distribution Volume of Glucose, IDVG)を算出するというものです。ブドウ糖ですので、血管内のみならず血管外の組織間液にも分布しますが、初期分布容量ですので、組織間液の中でも血管内とactiveに出入りしている組織間液に分布します。我々は、この分布領域を中心部細胞外液量

とし、心拍出量決定に重要な役割を演じていると考えています。心拍出量決定に重要な要素という点、循環血液量を想定される方も多いかと思われませんが、循環血液量というのは、実際にICGなどを用いて測定すると45~110ml/kgと大変幅広い幅を持っている体液量です。また、病態によって、循環血液量に変化がなくても、血管の収縮拡張によって静脈内pooling量が変化し、心臓前負荷の指標としては不適であることも分かっております。我々の食道癌術後患者での研究でも、循環血液量よりもIDVGの方が心係数と相関関係がはるかに高いという結果も得ております。

この度の診療技術賞の受賞を励みに、益々、IDVGという弘前大学originalな方法の研究と臨床応用、そして、普及に努めて参りたいと存じます。ありがとうございました。

静脈血栓症の予防と治療のとりくみ

呼吸器外科・心臓血管外科
谷口 哲、福井康三、鈴木保之、大徳和之、川村知紀、山内早苗、渡辺 健一
放射線科
森本 公平、対馬 史泰

●診療奨励賞を受賞して

呼吸器外科・心臓血管外科 谷口 哲

この度は、診療奨励賞を受賞させていただきました。グループを代表して、心より御礼申し上げます。

深部静脈血栓症は肺塞栓症による突然死を引き起こす原因として、マスコミにも大きく取り上げられています。特に外科手術後に生じることが多く、その点が各診療科の先生方の頭を悩ませております。我々は静脈血栓症の予防マニュアルを作成し、超音波診断を応用して、深部静脈血栓症の予防および治療を行っています。また、放射線科と合同で、肺塞栓症の予防のための下大静脈フィルター留置を行っています。その結果、各診療科の先生方のご協力もあり、深部静脈血栓症の早期発見が可能となり、院内発症の重症の肺塞栓症の発症は以前に比べかなり少なくなってきました。最近は近隣病院で発症した症例の診療アドバイスや転院治療の受け入れにも積極的に取り組んでいます。力を入れて診療すればするほどコンサルトが増え、スタッフの負担が増えるのが現状ですが、今回の受賞を励みとして、今後とも患者様や主治医の先生に少しでも安心して手術ができる環境を整えられるよう努力したいと思います。今後ともご支援よろしくお願い致します。

ひろだい保育園のご案内
～学部学生も預入可能に～

本学では、大学職員、大学院生のための「子育てと仕事」、「子育てと学業」といった両立支援策のひとつとしてひろだい保育園を設置しております。

これまで、保育園の利用対象者は、原則として本学教職員となっておりますが、平成20年12月17日から定員に空きがある場合に限り本学の大学院生に加えて、学部学生も利用可能となりま

した。(科目等履修生、研究生、聴講生及び特別聴講生を除く。)

園内には、保育室のほか給食室、沐浴室などを備えており、月極の基本保育、一時保育合わせて40人の園児の受入が可能です。

入園ご希望の方は、下記お問い合わせ先までご連絡願います。また、弘前大学ホームページからも概要と入園申込書をダウンロード可能ですのでご利用ください。

(総務課)

津軽凧絵の展示

この度、津軽凧絵師の櫻庭義造氏(青森県津軽凧保存会会長)の御厚意により、津軽凧絵6点を外来診療棟1階待合ホールに展示しました。本院では、以前より、旧外来診療棟から中央診療棟へ続く通路等に、同氏の作品を展示していましたが、本人からの申し出により、新たな作品を制作してもらい展示させていただくことになりました。

凧絵は、来院された患者様の目に付きやすく、院内において人の往来が多い、医事課窓口及び自動再来受付機の上部のスペースに展示しています。

展示された絵の迫力に、来院された患者様や付き添いの御家族様から好評の声をいただいております。今後さらに、このスペースを有効に活用し、患者様へのサービス向上や地域文化の発展に協力できるように役立てていきたいと考えています。(総務課)



【編集後記】

バレンタインデーまでは雪も少なくとても過ごしやすいのですが、2月中旬を過ぎてから突然大雪にみまわれ連日冷え込みました。激しい気候の変化のためか二人の息子たちとそれを看病していた義母がインフルエンザにかかってしまいました。うちの妻も勤務医なのでこんな時は誰が子供を看病するかいつも悩めます。「あんたが休んでめんどうみなさいよ。」なんて言われることもあります。結局のところ妻に任せっきりになることが多いです。医療従事者としてまったくもって本末転倒なのですが、病院に気軽に休みますとも言えません。ドイツでは男性の20%が育児休暇をとるということですが、そこまですべていかなくても気軽に子供の看病のために休める環境になればいいな...と思う今日この頃です。(広報委員 橋本安弘)

【お問い合わせ先】

総務部人事課職員グループ職員支援担当 TEL 0172-39-3023
弘前大学ホームページ <http://www.hirosaki-u.ac.jp/>



クリスマス会の様子